

比 喩 小 考

橋

豊

1 比喩は言語全般に関する事象である

F・ルーカスはその著*Style*⁽¹⁾の第九章 '*Simile and Metaphor*' に於いて、まづH・リードの『散文論』⁽²⁾を引用し、これを批判することから筆を起してゐる。ルーカスが引く所のリードはいふ。

散文は本来分析的描写の技術であるから、隠喩はその分析的描写にはならぬ特別な関係がないように思われてくる。詩にとつてこそ、隠喩はおそらくはるかに必要な、表現法上の方法であらう……われわれがそれを何と呼び、それにどれだけ重要にして包括的な機能を帰そうと、これは本質的に詩の領域にぞくするものである。⁽³⁾

つまりリードは、隠喩が重要な役割を果すのは詩の分野に於いてであり、散文に於いては隠喩は無くもがなのものであるといふ。そして「いかなる種類の比喩にも出くわさないで何頁も読むことができる」散文の見本として、スウィフトの『ガリヴァー旅行記』の一節を掲げてゐる。リードはまた同書で、隠喩の性質と重要性を言ひ当てたものとしてアリストテレスの言を引合に出してゐる。

……なかならず重要な点は隠喩を用いることができるということである。なぜなら、これこそ他人から学ぶことのできない事柄だからである。またすぐれた隠喩は不同の中に同一を直観的に認めるものだから、これはまた天才の特徴でもある。

(『詩学』xxii)

併しその直ぐ後でリードは急いで「だがこの文章でアリストテレスは詩について書いているのである」と断つてゐるのである。その点ルーカスは、同じくアリストテレスを引きながら、リードとは全く違つた結果を引き出すことになつたのである。

ルーカスによれば、アリストテレスは詩と散文との間に裂目を設けるやうなことはしなかつたといふ。ルーカスが引くアリストテレスは、その『修辞学』第三章で次のやうに述べてゐる。

談話では我々は誰しも隠喩を、それから日常的な流通の語 (ordinary, current words) を用ゐてゐる。明らかに、これらの語を適当に組合はせることで、常に明瞭であり、而も、慎みを失はない程度に (unobtrusively) 陳腐になることを避けるやうな文体に達することができるのだ……散文では韻文ほど手持ちが多くない (fewer resources) ため、それだけ苦勞して隠喩を用ゐる必要がある。

と。つまりここではアリストテレスは、隠喩とは誰しもが普通の言葉として用ゐるものであつて、隠喩の取り上げ方に於いて散文と韻文との間に相違があると言つても、それは量的な差異に留まり、質的な相違は存しないことを主張してゐるものの如くである。ルーカスによれば、H・リードはアリストテレスを引用してはゐるが、その基本的観点はアリストテレスとは全く逆のものだといふのである。アリストテレスの見解をこのやうに解釈するルーカスは、従つて、隠喩を韻文だけの専有物視する考へ方に対立する。而も彼が散文といふときは、散文で書かれた小説等の文芸作品ばかりでなく、一般の日常言語をも含めて言つてゐることを忘れてはならない。然ればこそ彼は、文学が出現してから隠喩が生じたのではないと言ふのである。

隠喩もまたどの文学よりも起源が古いといふのが真実のやうだ。太古の人間の衝動は恐らく文学的であると同程度に功利的でもあつたのだ。といふのは、針の穴を初めて「目」と、或はまた鋸の凸凹を「齒」と呼んだ人に、詩的動機を認める根拠は余

り見当らないからである。結局、隱喩は根強い人間的性癖であり、恐らくマンモスが住んでゐた時代と同じ位に古く、而もへリコプターの飛ぶ時代に至つてもまだ生命力がある。

ルーカスは、一般的に文芸作品と言語とが連続であるといふ命題を掲げたわけではないが、少くとも比喩に関する限りでは、両者に質的相違は認められないとしてゐるのである。R・ウェレックもまた『文学の理論』⁽⁴⁾の中で「隱喩はわれわれの日常の言語の多くのものなかに、ひそんでゐるし、俗語やありふれた諺のなかにもあきらかにみえるのである」と記してゐる。実際我々は、屢々、日常生活の場で比喩が用ゐられるのを耳にし、また目にしてゐる。そしてそれらが、文芸作品の中に於ける場合と同様に——具体的状況の重みを伴つて現れるために、時としてはそれ以上——生々とした実感を以て、迫ることを体験するのは珍しいことではない。数年前、U2型機撃墜事件のあつた後パリで行はれた記者会見の席上、フルシチョフが記者団に語つた言葉もその一例であると思ふ。

……諸君にはだれでも母親があるう。私も自分の父母をよく覚えてゐる。父は坑父で母は私たちにたまにしかクリームを買つてくれなかつた。クリームがテーブルの上のせてあるときネコがきてそれを少し盗むと母はネコの首をつかまえてふり回しクリームの残りにネコの鼻をつきこんでまたふりまわしたものだ。これはネコがやつてはならないことをしたためにどういふうに罰せられるかということである。米帝国主義者のエリクビをひつかまえてふりまわし、彼らにそのような侵略行為をすることができないことを知らせた方がよくないだらうか。(拍手)

ここでは、ソ連の領土内を高空から盗み撮りしようとした米軍機を、クリームを舐めようとした猫に譬へ、米軍機を撃墜したことを、猫の首をつかんでふり回すことに譬へるといふ、一種の比喩の形が用ゐられてゐる。ドイツ・フランスを始めその他の欧州の記者達が拍手を送つてゐるのは、かうした比喩を含んだフ首相の発言が、それだけ強い説得力を有してゐた為と推察されるが、繰返して言ふならば、これは政敵攻撃を使命とする政治家の談話であつて、決して「文学」ではないといふことである。

2 直喩と隱喩

H・リードは前掲『散文論』の中で、直喩と隱喩とについて次のやうに述べてゐる。

……人間もしくは馬について、それがきねずみのごとく敏捷に高い木にのぼった（＝he climbed high trees as nimbly as a squirrel）といへば、ある物体の特殊な性質（＝ここでは、或る人は木登りがうまいといふこと）と他の物体の一般的性質（＝ここでは、きねずみは一般に木登りがうまいこと）とを比較することになり、これが直喩と言われるものとなる。

これは直喩の定義を示したものと考へられる。また、

もしわれわれがさらに一步を進めて、“This man, the squirrel of his clan, climbed the high trees——”（一族のきねずみともいうべきこの男は高い木にのぼった——）のように、人間ときねずみがある意味で同一視すると隱喩が生じる。

といふのは、隱喩の定義と見られるものである。但し、リード自身、右の文の直後に

直喩と隱喩のちがいはただ文体上の精練度にある。

と言つてゐることから窺ふと、両者間の差異が絶対的なものでないことを示す積りであつたかと思はれる。併しながら、更にその後が続けて

比較が直接二部門でなされる直喩は、文学表現の初期の段階にぞくするもので……

と述べてゐる所をみると、先の「文体上の精練度」云々といふのは、実は、直喩よりも隱喩の方が精練度が高いといふことを意味するものと解されるのである。では何故に、隱喩は直喩より精練度が高いと言へるのだらうか。そのことについてリードは何も説明を加へてゐないし、筆者としては承服出来兼ねる所である。

再びルーカスを引用すると、彼は前掲書中で

直喩は二種の觀念を兩側に並べて置くが、隱喩になると、二種の觀念は二重に焼付られてしまふ。として、一応兩者の相連を認める立場をとつてをり、

直喩の方がより單純であり、起源的に古いと考へられるのは自然であらう

と言つてゐるが、その後で

隱喩もまたどの文学よりも起源が古いといふのが真実のやうだ

云々として、結局、起源的にも新旧の別はつけられないといふ見解を示してゐるのである。

ルーカスは無論、彼の母国語である英語を中心として論じてゐるのであつて、その説を日本語の場合に引き写しにするには若干の考慮を払ふ必要があるだらう。特に、彼国語では韻文と散文との区別が外形上からも明確であるのに対して、日本語の場合はその相連が必ずしも明瞭でない点などは注意すべき所である。併しながら、比喩に関するルーカスの一般的結論については、彼我の言語の差異を超えて普遍的に妥当する真実であるやうに思はれるのである。

国語の場合、外形的に「……のやうな」「……のやうに」などの語句が現れるものは直喩で、さうでないものは隱喩とする考へ方が行はれてゐる。「氷のやうに冷たい」は直喩であるが、「氷の刃」は隱喩であるといふわけだ。併しながら、これもやはり便宜的なものに過ぎない——といふのは、「鉄の意志」(隱喩)が実は「鉄のやうに堅い強固な意志」(直喩)といふ内容を言ひ表はしたものとすれば、兩者の差異は連続的な、還元可能なものに思はれるからである。「見附からわさびおろしが出て呵り」といふ川柳では、「遠くから見るとわさびおろしに見える、菖蒲模様を着けた番侍」といふべき所を「わさびおろし」の一語に短縮したものとみられるから、ここからも隱喩とは常に還元できるものであることが分るのである。「鴨が葱を背負つてくる」といつた慣用句の場合についても、ほぼ同様な説明がつけられるであらう。

直喩に関することでは、安本美典が、現代作家百人の文章に因子分析を施すに当つて、直喩が多いか少いかといふ因子に注目することにより、「修飾型——非修飾型」といふ分類型を設けることができるとしてゐる。また、この因子を用ゐて、作家の文章の性格のプロフィールを描くことが出来るとして、その実例を示してゐるが、これによると、大江健三郎の『飼育』の場合は、現代作家の平均に比して直喩は十で、非常に多いとされてゐる。他の作家の場合は例へば石原慎太郎の『太陽の季節』、谷崎潤一郎の『細雪』などは十で、直喩の数が平均より稍少ない方であることが示され、横光利一の『日輪』では十で、平均より多くも少くもないといふことになつてゐる。

これとは別に、筆者が大江健三郎の『遅れてきた青年』第一部第一章について数へたところでは、直喩は、分量にして十六頁⁽¹⁰⁾(四百字詰原稿用紙約五十枚分に相当)の間に五十四回、一頁平均三・四回の割で現れてゐることになる。比較のためであつて、次に三島由紀夫の『美しい星』第一章の場合を例にとると、同じく十六頁分では二十六回、一頁平均一・六回の割である。安本の分類では、三島は非修飾型、つまり直喩などの少ない部類に入れられてゐるが、『潮騒』の場合、同じく非修飾型の井伏鱒二(『多甚古村』の場合)について、三島の『美しい星』と同時期に発表された『武州鉢形城』を筆者が調べたところでは、十六頁分の間に五回(但し「カーキ色の軍服のやうなものを着て」の「やうな」は、不確かな断定ともとれるので、これを除けば四回といふことになる)だから、一頁平均〇・三回であつて、これと比較すれば、等しく非修飾型といつても、三島の場合はそれ程極端に少ない方ではないと考へられる。所で、右は直喩と見られるもの(外形上、『()のやうに』『()のやうな』『()のやうで』等の語形を有するもの)の外に、「()的」「()風」「()みたい」等の語形を伴ふもの若干数を含んでゐる)のみについて調べた結果であるが、実は隱喩について調べた場合にも、大略同様な結果が得られるのである。右の三作品の中で用ゐられた隱喩の回数をそれぞれ数へ挙げると、『遅れてきた青年』十三、『美しい星』一〇、『武州鉢形城』〇となり、これを更に一般化し

て言ふならば、直喩を多く使ふ作品はまた、隱喩をも多く用ゐる傾向があるといふことが出来る。結局、ここでも直喩と隱喩を区別するのは便宜的なものに過ぎず、両者を併せて、比喩的表現として取扱つて差支へないことが分るのである。

3 比喩の素材

扱、直喩と隱喩といふ区別が本質的なものでないとするれば、比喩について多少とも分析的な考察を行はうとする際に、比喩同志の間に於ける如何なる相違点に注目すべきかといふことが問題になる。そこで考へ得ることの一つは、比喩的表現が如何なる事物を譬へとして引合に出してゐるかといふこと、即ち、比喩の素材の差異に注目するといふことである。大江の文章が量的に比喩に富んでゐるといふことは、無論彼の文章の特色を示すものであるが、その比喩の素材について、或る種の傾向が認められるとすれば、それもまた、当の文章の特質を理解するための手がかりを与へるものと考へられるのである。

金岡孝氏によれば、万葉集には、人間の容貌・姿態・行動・心理などを植物に托して歌つた歌が多く、而もその比喩として用ゐられる植物は多種多様に互つてゐるといふことである。⁽¹³⁾今、翻つて大江の文章をみると、そこには動物に関する比喩が圧倒的に多いことが分る。『遅れてきた青年』第一部第一章では、比喩的表現(直喩・隱喩の別なく)総計六十七例の中、二十三例が動物を素材にしたものであり、全比喩中三十四%強を占めてゐる。植物に関するものは三例に過ぎず、比率としては5%に充たない。因みに『美しい星』では三十六例中、動物に関するものは二例で6%弱である。以て大江の比喩に如何に屢々動物が引かれてゐるかが肯かれるであらう。

「大江健三郎の文学」と題する座談会の席上、渋谷龍彦が「心理学的にみて……⁽¹⁴⁾糞便嗜好^{コフライリ}、それから屍体嗜好^{ネクラコフライリ}とか

獣姦主義 ベスタリアイ そういうものが全部大江さんの中にある」と評したことがあるが、比喻の素材の面からも、フロラー的ならぬフオーナの傾向が顕著に窺はれる筈である。

これに対して、三島の『美しい星』に於ける比喻の素材で、大きな比重を占めるのは、動物でも植物でもなく、自然現象でもない。余り適切とは云へないかも知れないが、日用雑貨・小間物の類といへば、ほぼ言ひ当てたことにならうか。節用集などの古辞書の意義分類に現れる「器財門」に属すべきものといへば、よりの確になるだらう。例へば

オリオンの三つ星は南西の中空に、下方のリゲル星とをつなぐ線が、古代の風のやうな形に懸つてゐた……

何ものかの糸に引かれるやうに、迷はずに道を辿つてゆくだけである……

天の糊がたちまちにして砕かれた断片をつなぎ合はせ……

新しいタオルのやうに汚れない権力……

西武線の始発電車が、明るい籠を延べたやうに山裾の木の間に走つた……

投げられた矢を発止と受けとめるやうに、西南の富士の頂きの雪は、突然蓄微いろに変貌した……

この種の比喻が三十六例中の十二例を占め、三十三％に達する。

所で、かうした傾向は、或は、この作品の主題と直接關聯があるかのやうな臆測を抱かせるかも知れない。といふのは、この寓意的な小説の一節で

フルンチョフとケネデイは、早速会つて、一緒に簡単な朝飯でも喰べるべきだ……

核実験停止も軍縮もベルリン問題も、半熟卵や焼き林檎や乾葡萄入りのパンなどと一緒に論じるべきなのだ。宇宙の高みから見たら、どちらも同様に大切なのだ、といふことを彼らに納得させなくちやいかん。地球人は殺人を大したもののやうに思つてゐるから殺人を犯し、その誘惑からのがれられない。

フルンチョフとケネデイは朝食の落ちこぼれたパンの粉を包んだナプキンを卓上に置くと、二人で肩を組んで外へ出て行つて

朝日を浴びて待つてゐる新聞記者に、かう告げるべきなのだ。

『われわれ人類は生きのびようといふことに意見が一致した』と。

放鳩も軍楽隊も何も要りはない。さう言つたとたん、すがすがしい一日が迂り出すのだ。地球がその時から美しい星になつたことを、宇宙全体が認めるだらう。

といふとき、この小説に於ける著者の狙は、重大な事柄を殊更日常の卑近な事実と対応させて——つまり比喩的に——説明することにあるやうに見受けられるからである。併しながら、大江の場合に『遅れてきた青年』にみられる傾向が、彼の他の作品にも及ぼすことが出来るのと同様に、三島の場合も、『美しい星』の比喩の素材についてみられる傾向は、この作品の特色であると同時に、また、寓意的な文章自体が三島の多くの作品に通有のものであるとすれば、当然のことながら、彼の他の作品にも現れて然るべき特徴的傾向であると言へるのである。

4 比喩と論理 —— 正法眼蔵の場合 ——

以上、比喩の例として文学作品ばかりを取り上げた嫌ひがあるが、これは、文学作品の中に比喩が豊富だからといふよりは、文学も言語であり、言語である以上言語の通有性としてその中に比喩的表現を含むのは当然のことであるといふ風に考へたい。次に取り上げる正法眼蔵は所謂文学作品ではないが、その叙述法の一環として使用されてゐる比喩的表現は、文芸性と切り離しても十分問題にすべき点を含んでゐるやうに思はれる。

諸仏の三昧・無上の大法を、むなしく坐してなすところなしとおもはん、これを大乘を謗する人とす。まどひのいとふかき大海のなかにながら、水なしといはんがごとし。(辨道話)

堂中の衆は、乳水のごとくに和合して、たがひに道業を一興すべし(重雲堂式)

莫作にあらばつくらましと趣向するは、あゆみをきたにして越にいたらんとまたんがごとし。(諸悪莫作)
 生といふは、たとへば人のふねにのれるときのごとし(全機)
 仏道は初発心のときも仏道なり……たとへば万里をゆくものの、一步も千里のうちなり、千歩も万里のうちなり、初一步と千歩とことなれども、千里のおなじきがごとし。(説心説性)

等々、正法眼蔵には比喩的な言ひ廻しと見られるものが多い。併しながら、この創見に満ちた文章の中では、比喩的表現と雖もこれを通俗的な譬へ話として解釈することを排斥して、これに独自の意義を籠めてゐる場合が実に多いのである。例へば、次のやうな逸話を掲げてゐることに、さうした傾向が窺はれるのである。

むかし則公くわんたんと監院といふ僧、法眼禪師の会中にありしに、法眼禪師とふていはく、則監くわんたんと寺なんぢわが会まにありていくばくときぞ。則公がいはいく、われ師の会にはんべりてすでに三年をへたり。禪師のいはく、なんぢはこれ後生なり、なんぞつねにわれに仏法をとほざる。則公がいはいく、それがし和尚をあさむくべからず、かつて青峰禪師のところにありしとき、仏法におきて安樂のところを了達せり。禪師のいはく、なんぢいかなることばによりてか、いることをえし。則公がいはいく、それがしかつて青峰にとひき、いかなるかこれ学人の自己なる。青峰のいはく、丙ひやう丁てい童子来求り火カ。法眼のいはく、よきことばなり、ただしおそらくはなんぢ会せざらんことを……(辨道話)

そこで則公は、この「丙丁童子来求火」の一句を極めて皮相にしかり理解してゐなかつたことを知らされるのである。則公は、丙ひやうも丁ていも共に火に属する語であるから、句全体の意味する所としては、火を以て更に火を求む、即ち、自己を以て自己を求むることであると解してゐたのであるが、法眼禪師は「仏法もしかくのごとくならば、けふまでにつたはれじ」と言い渡す。そこで則公は煩悶して一旦は法眼の許を去らうとするが、途中で気を取り直して引き返し、今度は心を入替へて謙虚な気持で法眼に向ひ、「いかなるかこれ学人の自己なる」と問ひかけるのである。すると、それに対する法眼の答といふのは「丙丁童子来求火」であつた。そして、これを聞くや則公は大いに仏法を悟る

所があつたといふのである。⁽¹⁵⁾この後、道元は

あきらかにしりぬ、自己即仏の領解をもて、仏法をしれりといふにはあらずといふことを。もし自己即仏の領解を仏法とせば
禪師さきのことばをもてみちびかじ、又しかのごとくいましむべからず。

と付加へて、この挿話を結んでゐる。即ちここでは、比喻は単なる文飾として、その技巧上の妙味を嘆賞すれば足りるといふものでなく、比喻的表現を介して伝へられる思想内容の理解と密接な繋りを有してゐる。従つて「丙丁童子来求火」という比喻的表現に対する理解の浅深は、則公監院の心境の高低と厳密に比例する結果になるのである。

また、古鏡巻では、特定の語句が示されるのではなく、南嶽が博を磨くことと、馬祖道一が坐禪に勤しむことが事実対事実として対比させられてゐる。

南嶽あるとき馬祖の庵いほにいたるに、馬祖待立す。南嶽とふ、なんぢ近日作ス什麼ニ。馬祖いはく、近日道一ニ祇管打坐するのみなり。南嶽いはく、坐禪なにごとをか図する。馬祖いはく、坐禪は作ス仏をス図す。南嶽すなはち一片の博ヲをもちて、馬祖の庵のほとりの石にあてて磨す。馬祖これをみて、すなはちとふ、和尚作ス什麼ニ。南嶽いはく、磨ス博ヲ。馬祖いはく、磨シ博ヲ用テ作ス什麼ニ。南嶽いはく、磨シ鏡ヲ。馬祖いはく、磨シ博ヲ豈シ得レ成レ鏡耶。南嶽いはく、坐ス禪ニ豈シ得レ作ス佛耶。

そして、右の一段の応答の解釈を遡つて、道元は従来の常識的見解を不満として、次のやうに述べてゐる。

この一段の大事、むかしより数百歳のあひだ、人おほくおもへらくは、南嶽ひとへに馬祖を勸くわん励れいせしむると。いまだかならず
しもしかあらず、大聖の行履、はるかに凡境しんじやうを出し離りせるのみなり。

⁽¹⁶⁾つまり、ここに至つては、対置の形で提出された事実——南嶽の磨博並びに作鏡——は、それによつて原の事実

——馬祖の坐禪並びに作仏——の対応を正確に且端的に認識させようとする意図を有してをり、この種の比喻的表現は、関係を明らかにするものであるといふ点に於いて、単なる修飾とは異なるといはなければならぬ。その意味で、これは論理の一種（判断の一形式）と認むべきものである。その場合には、対置された事実の關係、つまり論理が正

しく捉へられない場合は、原の事実の本質——馬祖の坐禪と作仏との対応——が正確に把握できないことになる。従つてこのやうな構文を単なる譬へ話として受け取るのは、浅薄の譏りを免れることが出来ないのである。正法眼蔵に於いては

仏法はたとひ比喻なりとも実相なるべし。(夢中説夢)

なのであり、比喩的表現が屢々論証表現そのものとして用ゐられるので、その取扱には慎重を要する。然れば

さきの問答往来し、賓主相交することみだりがはし。いくばくか、はななきそらに、はなをなきしむる。(辨道話)

も、前文に対する著者の単なる謙辞とみるよりも、道元の所謂「空華」の開演を寧ろ積極的に肯定してゐるものと解すべきなのかも知れない。三島由紀夫が『小説家の休暇』の中で、世阿弥の「花」について、花とは一理念の比喩ではなく、「それはまさに目に見えるもの、手にふれられるもの、色彩も匂ひもあるもの、つまり『花』に他ならない」と言つてゐることが、この際想ひ合はせられるのである。

はな 華は愛惜に散り、艸は棄嫌きけんにおふるのみなり。(現成公案)

についても、文脈から切り離してこの一句だけを取り出せば、愛され惜しまれる人は早く逝き、憎まれ疎まれるものほど生き恥を晒すといつた、人生の皮肉を述べた句のやうにも聞えるが、前後の文脈から推すに、ここではさういつた所謂比喩的な意味で用ゐられたのではなく、愛憎棄嫌の対立を超越したところにこそ仏道の本質はあるべきなのに、華を惜しみ艸を厭ふといつた取捨愛憎の念は容易に脱し切れないといふ、寧ろ「実相」を述べたものとみられるのである。

- (3) ルーカスの引用文には、この後に続けて、Poetry alone is creative. The art of prose is not creative, but constructive or logical. の二つのセンテンスがあるが、改訂版では削除されてゐる。
- (4) R・ウエレック、A・ウオーレン共著。太田三郎邦訳。
- (5) 朝日新聞 昭和35年5月19日付夕刊所載。
- (6) 佐藤孝『日本語文章表現学』など。
- (7) 麻生磯次博士『笑の研究』P 53参照。
- (8) 『創作の秘密』及び『講座現代語5文章と文体』所収「文章心理学」。
- (9) 同右参照。
- (10) 「新潮」昭和35年9月号P 222～P 237
- (11) 「新潮」昭和37年1月号P 201～P 216
- (12) 「新潮」昭和36年12月号より昭和37年2月号に至る。
- (13) 「比喩について」(「清泉女子大学紀要7」所載)。
- (14) 「新潮」昭和33年11月号所載。洪沢の他に江藤淳・篠田一士が出席してゐる。
- (15) 筑摩書房版古典日本文学全集正法眼蔵の注解によれば、「従来自分の考えを全くすてて、師に法をたずねた、それがとりもなおさず自己が自己を求める真の姿になっていたので、言下に師のことばがうなずけた」のだとある。
- (16) 磨博作鏡についての道元自身の積極的見解等については、拙稿「正法眼蔵といふ文章」(本誌第30号所載)の中で触れたことがあるので、ここでは省略する。
(昭和三九年九月)